



平和学習授業づくり交流会、開催される！②

「記憶と記録の継承」

「歴史は歴史年表を暗記するだけではない。歴史は物語である。語り部が伝えたい記憶は歴史の一コマなのです。家族への思い、戦時下の暮らしの厳しさ……。その話を聞いて始めて戦争の不条理や運命の過酷さなどを知ることができた。」ある大学生の言葉です。最近学校で語り部派遣の打ち合わせをすると、残酷な話や怖い話が苦手な子の途中退場の了承を求められることがあります。それはそれで仕方ない事ではありますが、この80年間平和が続いたのは、戦争体験者やその体験を聞いた高齢の子ども世代がまだ歯止めになっているのだと思います。いずれ戦争を知らない国民ばかりになったときのことを考えておかなければなりません。



退職後、どうしても捨てられないのが、学級便りと平和学習の感想文です。荒れた学年をもったときも、平和学習、つまり人権学習を行ったことで学級が変わっていったと感じました。その中で、「ひめゆりの塔」の映画を6年生に見せたことがありました。当時6月23日が沖縄慰霊の日であることは世の中に浸透しておらず、残酷な場面もあるこの映画を見せることを迷いました。3人の担任で映画を視聴し、「この子達だったら受け止める力がある」という判断と、戦争体験者である自分の母親の「子どもの目に覆いをしちやいかん。」の一言で決意し、6年生全員が視聴しました。予想通り、感想を見ると、子ども達はしっかりと内容を受け取ってくれました。

若い人に「どんな平和学習が心に残っている？」と質問すると、「平和の歌を歌う」や「ダンスでの表現」「朗読劇」などの返事が返ってきました。八幡中央高校の芸術学部へ語り部活動に行ったところ、お話の中で自分の心の中に残ったところを「書」にして表現してくれました。心に残るのは、受け身ではなく、自分で受け取ったことをアウトプットしたことではないかと思います。歴史の物語を得意なジャンルを生かして自己表現してみることも大切だと感じました。

最後に2022年沖縄慰霊の日に、沖縄市立山内小学校2年の徳元穂菜さんが書いた「こわいを知ってへいわがわかった」という詩を紹介します。戦争の話は悲惨で残酷な話ばかりですが、切り返さないためにはその実情を知る勇気も必要だと思います。

質疑応答の最後に、この日出口さんと一緒に会場に来てくださった語り部の河原さんにもお話をいただきました。語り部活動に行った学校の6年生の感想に「学校で学習した事よりも、河原さんの話が一番怖かった。」とあったそうです。河原さんは6才の時に空襲にあい、たくさんの遺体が並べられているのを目の当たりにしたそうです。「私は見たことをそのまま伝えます。目が飛び出た遺体や、腸が飛び出た遺体などいろいろな遺体がありました。怖いという気持ちが平和のありがたさに気付くことになると思うのです。」との言葉にその決意を感じました。

講演を終えて、「平和授業、やらねば！」とパワーが湧き上がってくる素晴らしいお話でした。



NO.19 につづきます

わからないこと・困ったことがあったら… 何でも気軽にお問い合わせください！

///JTU 北九州市教職員組合 〒802-0072 小倉北区東篠崎3丁目4-1

E-mail:jtuhokyu@lime.ocn.ne.jp

北九州教育会館 TEL (093) 953-0381

